



明治詩壇の巨匠、薄田泣菫が生まれた家

明治時代の詩人「薄田泣菫」が幼少期と晩年を過ごした建物で、地元住民や顕彰会などの尽力により母屋の改修工事が2003年(平成15年)に行われ、泣菫にまつわる品や原稿、写真などの展示物が一般に公開されるようになりました。

泣菫は1877年(明治10年)に生まれ、17歳のときに上京。上野図書館で和漢洋の書物を読むために英語塾に通いヨーロッパの古典を英語読み知識を身に着けました。

晩年に健康を害しながらも創作活動を続け、1945年(昭和20年)に多感な少年時代を過ごした生家に帰りほどなくして68年の生涯を終えました。

◆ 施設のおすすめ

当施設では、泣菫にまつわる品、原稿や本人の写真、使っていた道具などが展示・公開され、詩集は手に取って読むことができるようになっており、泣菫の作品に触れることができます。

交友関係は広く、中でも与謝野晶子は泣菫の愛読者であり親交も深く、母屋にはやり取りしていた手紙が残されています。

また、建築物としても当時の生活をうかがい知ることができ、井戸や五右衛門風呂もそのまま残っています。

庭は雑草園と名付けられ、梅や桜、水仙などさまざまな植物が植えられ四季を通して草花に囲まれる環境になっています。

◆ 子どもたちへのメッセージ

泣菫は幼少期と晩年を生家で過ごしました、特に幼少期の経験があったからこそその後の人生で数多くのすばらしい詩・随筆を生み出していました。

泣菫の原点になった場所といえるかもしれません。

原稿や詩集を通して泣菫の息吹を感じ、言葉の奥深さを知ってもらえればと思います。

また、明治時代の雰囲気を残す生家は、当時の生活を知るうえで大変貴重なものになっています。



母屋



室内の様子



展示エリア



白羊宮の原稿



泣菫の詩集



国民歌謡「白すみれ」レコード



五右衛門風呂



庭園雑草園